

救いを求めて

長谷川和子

## 一、記憶のない兄

私は神奈川県相模原で生まれた。近くの神社の門の上に「皇女和の宮」と言う看板があり、その一字をとって和子とを名付けたと母から聞いたことがあった。

二歳上に兄が居たが私には記憶がない。

父は当時軍需工場の電気技師として働いていた。戦争が激しくなり、私が生まれた昭和一九年に、父の実家がある新潟県中魚沼郡下船度に身を寄せた。翌年敗戦となり、再び両親は私を連れて相模原に戻った。だが家には見知らぬ人が住んでいて、我が家だと主張しても「私たちの家です」と譲らず、泣く泣くまた父の実家に戻ることになった。当時の父母の落胆振りはいかばかりであったか、失意に打ちひしがれて郷里に帰えらざるを得なかった姿が想像できるのである。

やがて、父は東北電力に勤め、母は野良仕事の手伝いをしながら私を育てたのであった。数年後、父は散宿所（事務室、資材置場、住居が連なる二階建ての一軒家）への勤務を命ぜられ、新潟県内を三年に一回の割りで勤務。その地域の電力を守る仕事に精を出していた。その間、二歳ずつ下に、妹と弟が誕生した。

父の行動に異変を感じた。物心ついた頃、優しい父が鬼のような形相で母に暴力を振る

う姿を目の前にして恐怖で身が縮む思いであった。五歳位から母を庇い、父に「やめて」と向かっていくのだが「うるさい」と投げ飛ばされるのが落ちであった。

家庭内の事は誰にも話すことができず、内気な私は益々内向的な性格になっていった。無口な私のことを一年生から六年の担任それぞれが「和子さんの将来が心配です」と通信簿に記されたほどであった。人前に出ることを極度に嫌がった私は終業式の時など講壇に上がらねばならないときには先生に背中を押されたり腕を引っぱられたりそれでも嫌がり、引きずられるようにして壇に上る始末であった。

毎夜酔って帰宅する父が玄関の戸を開けたとたん、どんなに熟睡していても目が覚めた。これから始まる父の行動に不安を覚えながら布団の中で固くなっていった。そんな父でも私が持病の足が痛むと寝付くまで足を摩ってくれた。

二人の子の親となった頃、酒を口にするたびに父は涙ながら兄のことを語った。風邪が原因でぐったりしている三歳の子を抱いて何軒もの病院をまわったが「戦っている兵士が大事だ。死にかけている子は診られない」と。父には何十年経っても消し去ることができない出来事であったのだ。

酒に溺れた原因は兄の死にあったのだろうか。桐の木で棺を作り自ら火を放ち埋葬したという。目の前の父が小さく見え、父母も兄もいとおしく思えたのであった。

## 二、母の教え

ある冬の夜のこと、たしか小学五年生の頃だったと思う。いつものように酔っ払って帰った父が暴れた拍子に、電熱器をひっくり返してしまった。昼から煙があがった。

「和子逃げろ、火事になる」と母の大声に、とっさに寝巻きのまま外に飛び出した。その時、窓に群がって中の様子に興味を持つ村人たちに驚くと同時に、「面白半分聞き耳を立てるなんて、なんで母ちゃんを助けてくんねえだ」と怒りが込み上げてきた。

「和ちゃん、こつちへ来い」と隣家の小父さんが私を連れて行って、その家の布団に寝かしつけてくれた。だが、素足だったので手足が凍え身体は震え、寒さで寝つかれないでいた。

しばらくして母が迎えに来てくれた。

「眠っているから明日帰すから」と階下の方で小母さんの声がした。

「悪かったのう、迷惑かけて」と母が謝っている声が聞こえた。

「和子降りてこい、帰るよ」と母の少し強い口調に、布団から飛び出すようにして降りていくと「済まなかったのう」と母はまた頭を下げていた。

ものの一分もかからぬの家までの間に母は、「和子、人様に迷惑をかけてはなんねえ。母ちゃん  
は父ちゃんのこと、どんなに辛くたって頑張っているんだから、人様に迷惑をかけるようなこと

はしてはなんねえ、いいか、覚えておけ」と言った。静かな口調ではあったが、怒られたと思った。母に叱られたのは後にも先にもこの時だけであった。

それからは母を悲しませてはいけない、少しでも母に樂させてあげたいという思いで四時に起床、かまどに火を焚き、御飯が炊けるまでそこから離れなかった。家や外の掃き掃除を済ませてから登校する「いい子」になった。そうして私は成長していった。

ふだんの父は優しく真面目に仕事に精を出しているのだが、山奥の部落に電気の仕事に行った先々で、お礼として濁酒が振る舞われる。酒に弱い父はすぐに酔ってしまい、陽気に唄い踊るらしい。しかし帰宅すると人が変わったように母に暴言暴力を振るうのである。

「父ちゃんに濁酒を出さねえでくんないかのう」と村中をと村中をまわって懇願したいと思ったものである。酒が憎く、世の中から無くなればいいと真剣に思ったのだ。

その思いを母に伝えると「人間は嬉しいときや楽しいときは酒、悲しくて苦しいときも酒。世の中から酒はなくならないよ」と言われた。子ども心にも、そんなものかと思ひ、よけいに酒が憎らしく嫌いになった。

月一回父は大割野町にある東北電力の支店に出勤していた。ふだん食することのできない肉や果物、菓子などを毎回求めて帰宅するのであった。その中にぬりえがあった。妹とクレヨンで塗るのが面白くて楽しかった。その数は七〇冊以上になった。

### 三、積雪の中で

今でこそ世に豪雪地帯で知られるようになった津南町ではあるが、町の中心から西に徒歩一時間の所に中深見村があった。私はそこに五歳から十二歳まで住んでいた。

時には三メートルも積もる雪の中の生活は半年近くも続いた。

起床後すぐにやることは、長靴の上にかんじき（雪の中に足を踏み込んだり、滑らないように竹でできた輪）を履き縄で締める。

こしき（板でできた平べったい、スコップのような形をしたもの）で雪を掻きわけ、かんじきで踏みしめて玄関から通まで道を作る。隣近所どこの家でも同じように作業をする。さらに隣家の前まで雪を踏みしめて通り道をつける。バトンタツチのようにして、皆の協力によって大通りまでの道が出来上がるのである。この作業は夜半降りしきる雪によって道が無くなるので、毎朝のように行かねばならない。そうしないとどこへも出かけることができないのである。

中学生になると学校へは、いつもスコップがスキーを担いで登校した。

体育の時間は裏山に登り、スキーの授業となるが殆ど雪掻きに費やされる。校舎の屋根から降ろされた雪を掻く仕事に従事。一階の教室は雪に埋もれており、窓には囲いがして

あるが窓ガラスを壊さのように雪を掻き、遠くに投げる（そう遠くには投げる事はなかなかできない）その投げられた雪が更に次の生徒によって、遠くに投げられて少しづつ一階の校舎が姿を現すのである。

小高い丘の上の学校は下校時、列になりながらスキーで坂を下って家路に着いたものである。様々な運搬はそりが活躍していた。

父は各家々の電気のメーターの検針に月一度出向くのであるが、ふた山越した民家に行くときはスキーで移動していた。

酒乱で家族を悩ませていた父だったが人々からは「神様のような人である」と言われていた。山奥の民家が何軒もない家々の部落では外に出ることもままならず「困っている」と言われれば、履いていったスキーを「これを使って出かければ」と差し出す。本人は長時間かけて雪藪を掻き分け、腰までつかりながら白熊のようになって帰ってくることもあった。それほど積雪の生活は厳しかったが、その分春の訪れは人々に歓喜を与えた。

小鳥の鳴き声、小川のせせらぎ、顔を出す露のとう。庭を掃く土埃さえ嬉しさを感じたものである。やがて桜が咲き新緑の季節となり、木の芽や蕨、ぜんまいが収穫できる頃になると、家族五人がそれぞれリュックを背負い採りに行く。このときばかりは酒を口にすることなく、優しい父であった。

#### 四、新しい土地で

中二年二年のとき次々と虫垂炎にかかり、移る病気なのかと思えるほど、クラスの半数が入院することになった。私も手術することになった。術後目覚めたとき側に付添ってくれたのは母方の祖母であった。父を一人にしておけない母の気持ちにすぐには理解できなかった。

一四歳の春。父の転勤で小ヶ谷市岩沢に引越した。住いは駅前通りであった。玄関を入ると事務所があり、その奥が住居で電気関係の機材を保管する倉庫が同棟となっていた。

母は広い敷地を耕し、何種類かの野菜や花を作った。秋にはダリアが手毬のような丸い花を咲かせた。行き交う人たちが足を止めて楽しんでいた。そのことが母の喜びであったようだ。今でも秋になるとあの鮮やかな色合いのダリアの花を思い出し、懸命に働いた母の姿を思うのである。

家のすぐ裏手に中学校があった。私は三年A組に転入した。

転校生は初めてのこたらしく、物珍しいのか廊下を通ると窓が次々と開けられ、顔が出てくる「来た来た」と言う声の中を恥ずかしさで下を向いて歩いていった。

同時期にSさんと言う転校生がB組に入った。放課後、ピアノを弾いていると「ピアノを弾くなんて」「オイオイ見てみる」と音楽室のドアが開けられ、生徒がなだれ込んでくる



こともあつた。Sさんもピアノを弾き、知的で快活な少女だったので何かと比較され、注目の的にされた。国語の時間に教科書を読めば「かわいい声」とざわめき（普通の声なのに）弁論大会に出場すれば「弁士」とあだ名をつけられ、嫌でならなかった。

当時の父の仕事は、地元の農家の人に臨時作業員として働いてもらうことであつた。

穴を掘り、電柱を立てる電線を張っていくのである。母は夕方になるとたくさんの料理を作り、風呂（水は手押しポンプで組み上げる）を沸かして、帰ってきた作業員たちに入浴と夕食を勧めた。当然酒が出るので、時間が経つにつれ父の口説きが始まる。作業員が帰った後は、必ず大暴れとなり、障子やガラス戸が壊される。

母は一晚のうちに、折れた障子の棧を糸でくくって止め、その上に紙を貼り、ガラス破片を片付け、ひび割れた所には紙をつなぎ合わせて直していた。目覚めてきれいになった居間を見て、母は夜、寝ているのだろうかと心配になった。見れば母は何時ものように台所に立っていた。感心している私に、母は「作業の人がくる前に直しておかないと、父ちゃんをやったと思われてしまうからなあ。父ちゃんは皆の上に立って、仕事を頼む方だから、こんなことを知れたらまずいべ、ただそれだけのことだ」と事もなげに言った。

そんな父も大雪や災害で電気の故障の際には夜中でも現地へ向かっていた。男手が必要な時に父は常に不在だったので、我が家では母子で雨戸に釘を打って留守を守った。

## 五、哀れな父

我が家は相変わらず惨憺たる状況であつた。父は毎晩酔つて帰つてきては母を胴網（電柱の上で仕事をするとときに体を支えるための麻で出来た太い縄）で殴るようになっていた。私は階下の様子を窺いながら息をひそめて待機し「ここだ」と思つたとき「それ行け！」と妹と弟に号令をかけ、階段を駆け降りる。

部屋の中は襖や障子が破られ、窓ガラスの破片とひっくり返されたテーブルで足の踏み場もない。殴りかかつてくる父を弟が足掛けで倒し、馬乗りになつて暴れないようにする。母と妹と私が、父の体を押さえる。「何をするんだ」と叫びながら必死で起き上がるうともなく。「親にこんなことをしているのか？」悲しそうな顔で父は体を起こそうとしている。その力の強い事……。「好きでこんなことをしてられんだねえ、父ちゃんさえおとなしくしてくれば……」涙を流しながら私は言った。父が哀れでならなかつた。友だちは今頃夢の中、深夜にこんな出来事を繰り返している私のことなど、クラスの者は知るよしもない。毎夜危険が伴うドタバタ騒ぎが続き、生きているのさえ嫌になつていた。

母は私を頼りとし、飲み屋から電話がかかってくると父を迎えに行くのは私の役目であつた。酔つた父を店から連れ出すのだが、家までの道から大通りに出て、トラックの前に

立ちはだかり止めてしまう。私はあわてて運転手に謝り、父の手を取って歩き出すのだが、大声で私への悪口を言い、道路に寝ようとする。人々が興味本位で見ている中、やっとの思いで家に辿り着くのである。父は、飲み屋では現金でなく付けで飲んでいたので、月末になると髪を結い上げ、和服を着た女性がお金を取りにきていた。

父が通帳を持ち出して紛失したときも、母は「捜してくるように」と私に言った。消極的な私は泣くような思いで、父が行きそうなところを一軒一軒まわって、事情を話して捜したのであった。

昭和三十四年、岩沢町でテレビが入ったのは我が家と他にもう一軒の二軒だけであった。皇太子と美智子妃の結婚式の放送があったとき、我が家に近所の人たちが集まり、一緒に観た思い出がある。それ以来、時々居間に近所の人たちが集まってテレビを観るようになっていた。

ある日、いつものように父が酔って帰ってきた。部屋に上がるなり、花瓶や電灯をもぎ取り玄関の床に投げつけた。テレビを覗いていた人々は驚いて、慌てて外に散って行った。父の乱暴は止まらず、玄関に置いてある、自転車や空気入れ、シャベル、箒、塵取りなどを手にするもの全てを道路に叩き付けた。怪我人が出なかったことが幸いであった。

## 六、新しい道を求めて

父さえ居なければ我が家は平穩でいられると思うようになり「父と別れて四人で暮らしたい。中学を卒業したら働くから」と母に言う。「別れたら食べていけないし、お前を上を学校に入れることができない。将来結婚するとき片親だと不憫だから」と言う応えであった。諦め切れず、一六歳のとき「友達の所に泊まる」と言つて八時間かけて母方の叔父を赤羽に尋ねた。住所を頼りに捜し回つたが見つからず、家々に明かりが灯つても捜すことができず、泣きたい気持ちを押しさえながら、やつと辿り着くことができた。

叔父に全てを話し、今後のことを相談したのである。三日間泊まつて、叔父が上野駅まで見送つてくれた。元の生活に戻つただけで、何も変わることはなかった。一七歳のある日、ルーテルアワーから聖書通信講座が届いた。受講を申し込んだ覚えもなく、なぜこんなものが私の所へと不思議に思いつつも、教材が届くと聖書に関する問いに答えを記入して送り続けた。

学び終わる頃「私の住んでいる近くに、教会はありませんか」と質問を記入して提出した。紹介されたのが十日町教会であった。教会の前まで行つたが、足が前に進まない。門から中に入れないで帰ることを繰り返して、三回目によつと門を潜ることができたのである。

玄關の前に立つと「良くいらつしやいました。さあ、どうぞ」と柔和な顔をした牧師が迎えてくれた。教会堂に足を踏み入れると、そこには見たこともない別世界があった。

静寂の中で共に祈り賛美顔を歌う人たちの敬虔な姿が……。  
世の中にこのような所があったなんて、驚きであった。

常に「死」を考えていた私は、心の飢えを満たすために熱心に教会に通った。

『たといわたしは死の谷を歩むともわざわいを恐れません』 詩篇二三・四

この言葉を聖書の中に見つけたとき、父が酔って暴れる状況が、まさに「死の谷」を毎夜歩んでいるようなものだと思った。

『私は耐え忍んで主を待ち望んだ。主は耳を傾けて、わたしの叫びを聞かれた。主はわたしの滅びの穴から、泥の沼から引き上げて、わたしの足を岩の上におき、わたしの歩みをたしかにされた』

この詩篇の言葉も、私のことを指しているように思えた。この不幸は必ず「よい方向へ向かっていく……」とかすかな望みを持ったのである。『苦しみにあつたことはわたしに良いことです』詩篇二九・七一の言葉に納得。『私は真理であり、命であり、道である』を信じて、キリストのことは解らないまま、昭和三九年三月一九日の復活祭に、松井愛美牧師より、受洗した。

## 七、洋裁の道へ

「手に職をつけるように」と母は、ドレスメーカー女学院に行くように勧めてくれた。本科、研究科、師範科と三年間通い、教師の免許を取得することができた。

卒業後は十日町にある小島商店(和服や洋服生地を販売)に勤務。洋服の縫い子として二〇余名の職員と共に服の仕立をしていた。

当時、既製品は少数で生地を購入、仕立てもらうのが流行だったので、縫い子たちは引張り風であった。ところが入職数カ月後に仕事中に倒れてしまった。

小千谷市立病院で診てもらうと、数ヶ月前長岡市の大病院で蓄膿症の手術をしたのが悪化したとのこと、急遽手術をすることになった。入院は三ヶ月に及び不安でならなかった。その後、社長に話をし、松井牧師に毎週月曜日に職場に来て頂き、聖書の話をして頂いた。ラジオ体操に牧師も参加。朝礼後、一五分程職員一同で伺った。

よくぞ快くゆるしてくださった社長と牧師の熱意、黙って聞いてくださった社員たち、奇蹟に近い出来事ではなかったかと思うのである。

東京オリンピックをテレビで観たのは職場の和室であった。三〇畳の広さで休憩室であり、寝泊まりする部屋であった。時に私は一九歳であった。

いずれ自分の店を持ちたいという思いが沸き上がり、デザインを学ぶため二一歳の時上京した。その頃、両親の住まいは十日町市川西町の社宅であった。妹はバス会社に就職、ガイドとして働き、弟は高校生であった。父は住いから西北、山一つ越えた松の山町の社宅へ赴任していた。そこへ、母が時々通っていたが、父の酒癖は相変わらずであった。

上京に躊躇していると「家のことは心配しないで」という母の言葉に背を押された。

上京後、松井牧師より紹介された巣鴨ときわ教会で礼拝を守るようになった。

大塚に居を構えたが、洋裁店で働く収入は五千円のアパート代に消えてしまい、食べるにも事欠いた。少しでも収入のよい店へと洋裁店を替えたりもしたが、歩合制のため収入が一定せず、生活は苦しかった。しかしこの間、学校では学び得なかった技術を習得できた。

やがて、事務系の仕事を見つけ、日中は神田の繊維会社で働き、夜はアパートで洋服仕立ての注文を受けた。念願のデザインスクールに行けたのは、上京して二年後のことであった。日曜日の午後から学ぶ所を見付けてくれたのは、同い年の職場の男性であった。ありがたかった。そして無事終了することができたのである。

この頃渋谷のケーキ店で働いていた妹が四畳半一間の私の部屋に同居するようになり、隣室には大学に学ぶ弟が住んだ。

## 八、夫の仕事

二五歳のとき知人の紹介で一人の男性と知り合った。建設会社に勤務して一〇年間、盆と正月に休みをとるだけで、土、日も現場監督として働く仕事一筋の人であった。出会ったその週の日曜日に、彼は教会にきてれた。共に礼拝を守れたことに感謝し、神が与えて下さった方ではと確信して、一九六三年八月、神田のYMCAホテルで熊谷牧師の司式によって、キリスト教で式を挙げたのである。

夫の上司が祝辞を述べた後「私共の仕事はとても厳しく、耐えられずに奥さんが実家に逃げ帰った例もあります。どうか、ご主人の仕事を理解していただきたい」。と言われた。その言葉はすぐに現実のものとなった。

三ヶ月後、妊娠が分かり「切迫流産の恐れがあるので絶対安静に」と医師に言われた。しかし夫は早朝に出勤し帰宅は真夜中。誰も居ないアパートの一室で安静を守り、十ヵ月後に男児を出産した。

一ヵ月後、立川駅前にみどりやデパート建設のため、引越すことになった。総監督として働いていた夫は、六時に出勤、帰宅は二十三時頃だった。息子を抱くこともなく、夕食後は倒れるように寝てしまいう様だった。



夫の生活に合わせながらの育児は徐々に過労となり、慣れない土地での息子の病院通いも負担となっていた。やがて喉が口から飛び出る感覚と動悸が止むことがなく、救急車でなんども運ばれた。しかし夫は出勤していった。

自律神経失調症のために生活ができなくなり母に上京してもらって一カ月世話になった。その後夫の実家にも身を寄せ、米沢市立病院の精神科に入院した。完治するまでの間、耐えがたい苦悩を経験をした。

二年後に福島、三年後には仙台へと転勤となった。私は五橋教会員となり、五歳の息子と三歳の娘は西堂牧師より幼児洗礼を受けた。四年後に夫は東京へ、家族はさいたま市に住み、緑聖教会員(元聖学院教会)となって四十二年になる。役員として古参になった。

夫は六〇歳で退職、その後、送付される図面の積算をしていた。

私は老人施設で相談員として働いていたが、五〇歳でやめようと思っていた矢先、夫が会社の保証人になっていたことを知り、我が家の苦悩が始まった。利子が日増しにふえ、私の安賃金だけでやり繰りした。

夫は六五歳でパーキンソン病を発病したが、その年受洗。共に礼拝を守り、十三年間、夫は病の愚痴は一言も言わず、二〇一七年二月に召された。娘が教会学校の教師と奏樂の奉仕をし、孫たち三人も教会へ繋がっている。それが今の私の救いとなっている。

## 愛誦聖句

\*コリント第一、一〇・一三

あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えてくださるのである。

\*ペテロ第二、三・一四〜一五

愛する者たちよ。安らかな心で、神のみまえに出られるように励みなさい。

\*詩篇一一九・一〇五

あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です。

## 愛唱賛美歌

\*讚美歌（第二編一九五番

キリストにはかえられません

\*讚美歌

二四三番

ああ主のひとみまなざしよ